

スペイン語圏を知る本 (その45)

川成洋ほか編「スペイン内戦とガルシア・ロルカ」 (南雲堂フェニックス、2007)

評者 坂東 省次

隣接諸科学によるスペインの総合的な研究をめざす、いわゆる「スペイン学」が日本で開始したのは、今から130年前のこと。日本におけるスペイン学の曙を記したのは、岩倉具実米欧使節団に同行した久米邦武が帰国から6年後の明治10(1877)年に刊行した『特命全権大使米欧回覧実記』に含まれるスペインに関する記事であった。

以来、130年の間に刊行された日本におけるスペイン学関係の文献は、『スペイン関係文献目録』(行路社、2005)にも明らかな通り、膨大な数に及んでいる。その中で分量的に一番多いのはスペイン内戦(1936-1939)に関する文献で610点、第2位が名著『ドン・キホーテ』の著者ミゲル・デ・セルバンテスとその作品に関する文献で600点、そして第3位がガルシア・ロルカに関する文献で202点である。つまり、スペイン内戦とガルシア・ロルカは日本人の間で関心の高いテーマであることがよくわかる。

スペイン内戦に関する文献は内戦勃発の年から登場し、50年後の1986年には次のようなシンポジウムや出版が行われ、内戦の意義が改めて問われた。

井出 洋「スペイン人民戦線の50年」『文化評論』

川成 洋「スペイン内戦50年目のマドリッド」『国際旅団の讃歌について』『公明』

川成 洋「スペイン内戦—未完の現代史」『月刊社会党』

斉藤 孝「1930年代の記憶と再生—スペイン内戦開始50周年に寄せて」『世界』

堀田善衛・樺山紘一「対談 スペイン内戦50年」『朝日ジャーナル』

若松 隆ほか「国際シンポジウム スペインと内戦と現代」『朝日ジャーナル』

一方、ガルシア・ロルカに関する最初の文献は、翻訳が1930年(「馬賊の歌—1960年のこと」笠井鎮夫訳)、論文は1952年(朝吹登美子「パリで観たロルカの芝居」、内村直也「ロルカの戯曲—ベルナルダ・アルバの家」)である。1998年には生誕100年を記念して『ガルシア・ロルカの世界』(行路社)と『ロルカとフラメンコ』(彩流社)が刊行され、また記念行事「生誕百年記念祭 ガルシア・ロルカの世界」が京都外国語大学で開催された。

昨年2006年は、スペイン内戦が勃発してから70周年、また国際的詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898-1936)がフランコ側によって射殺されてから70周年であった。これを記念して、まず11月に早稲田大学でシンポジウム「スペイン内戦70年」が、また12月には京都外国語大学でシンポジウム「スペイン内戦とガルシア・ロルカ」と詩の朗読会が、そして今年6月は関西外国語大学でシンポジウム「スペイン内戦とゲルニカ」が開催され、これで一連の記念行事が幕を閉じた。

これら3回に及んだスペイン内戦記念行事は多くの成果を生み出したが、その一つが本書の出版である。本書は、I部「シンポジウム スペイン内戦70年」、II部「世界の中のスペイン内戦」、III部「ガルシア・ロルカ再考」、IV部「シンポジウム スペイン内戦とガルシア・ロルカ」の全4部からなる。総勢40名を数える執筆者による本書刊行の意義は単に「スペイン内戦・ロルカ・ゲルニカ」70周年の記念出版にとどまらない。70周年を記念する日本で唯一の出版物として、30年後の百周年につながるきわめて重要な出版物であるといえよう。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)